



門崎の地域と農地を守る 農事組合法人門崎ファーム

農事組合法人門崎ファーム(代表理事組合長千葉榮恒)

は、3月に184名の構成員により法人登記し、5月には大規模に農地を集積しました。法人の母体である門崎地区農地管理組合時代から農地の利用調整や法人化に向けて検討や研修を重ね、今年の区画圃場整備事業完了を機に、これまでの自己完結型農業から効率的な農業経営の永続性と農業所得の確保を目指して方向転換しました。

門崎地区は、水稲を中心に野菜、畜産を組み合わせた複合経営による水田農業地域であり、借受面積48・8ha、水稲28・5ha、一般米24ha、有機米0.5ha、飼料米20ha、酒米0.3haが作付されます。平成16年の区画圃場整備事業導入時に、絶滅危惧種に登録されているメダカとの共存を図り、圃場や水路に工夫を凝らして、メダカが水田を自由に出入りし繁殖できる構造とした例は、全国でも稀です。地域のシンボル「メダカ」と地域住民、農業が共生する環境保全型農業、門崎メダカ米のブランド化を目指して株式会社門崎(格之進)や株式会社磐乃井酒造と共同で販売戦略の充実も進めています。

組合長の千葉さんは、集落ぐるみの経営は初めてで不安も多い。一人一人が知恵を出し合い合意結集し役割分担をこなすことが大切。若い担い手の育成や、既に生産を始めているメダカ米の消費拡大、良質の酒米生産による「大吟醸酒風の旅人」の販売拡大にも力を入れたいと抱負を話していました。

**東日本大震災被災地支援
陸前高田市で草刈り実施**

一関市農業委員会は、6月27日、東日本大震災で津波により甚大な被害を受けた陸前高田市に赴き、農地の草刈りを実施しました。作業を行ったのは小友町のふるさとセンター周辺の農地で、震災前は水田や畑が広がっていた地域です。

当日は、天候にも恵まれ、委員は午前7時に一関市総合体育館を出発し、指定された農地に到着後、9時30分頃から持参した草刈機で作業を開始しました。伊藤公夫会長をはじめ31名の参加者は、心地よく吹く風の中で復興への願いを込めながら精力的に作業を続けました。今年も平泉町農業委員会の参加者11名と合同による支援作業であったことから広範囲の草刈りができ、生い茂った草を刈り取ると農地としての姿が取り戻されました。

農業を続ける意欲が再び湧き上がるよう今後も支援する気持ちを伝えていきたいと思えます。



**梅で地域おこし
「梅の里」の活動を通して**

千厩町馨清水の「いわしみず梅の里」について紹介します。昔からどの家庭でも栽培している「梅」を活かしての地域おこしに共感した人達が集い、平成16年に発足し、10年目を迎え

ます。栽培部会、産直部会、加工部会（女性）の三部会で構成し、会員は、男性24名、女性17名合計41名、私は夫婦で入会し活動しています。

栽培地は、地区に点在し、面積は約1ha、千厩旧片倉工場跡地の畑も含め300本もの梅の木があります。減農薬に努め栽培された梅は、7月初旬に一粒一粒手作業で収穫し丁寧に選別します。水洗い、生漬け、土用干し、しそ揉み、しそと一緒に本漬けを経て冷蔵保存した後10月下旬に商品となります。昨年は、小梅を含め約1トンを「梅干し」や梅ジャム無添加「梅びしお」へ加工しました。

昔から「梅は三毒を断つ」と言われ疲労回復や整腸作用、高血圧に、また夏バテ防止と体に良い食材とされていますが、その郷土の味は、千厩夜市、日曜市での販売のほか「千厩うまっこ便」の詰め合わせとしても評

判は広まり、最近では3キロ〜5キロと大量購入するお客さんもいます。

「梅の里」の活動は、会員にとって農業のリーダーとして日々抱える課題を話し合う交流の場、また憩いの場となり地域の絆を深めています。地道ですが、一つの取り組みに向かって地域のみなさんと連携し、後継者も育てながら、無理はせず、何より楽しみながら美味しい梅づくりと「梅の里」のため活動していきたいと思えます。

投稿 農業委員 千葉孝子さん



未来に残したい風景
かなやま
舞川 金山棚田

舞川の相川地区では、「金山棚田を守る会」（会長千田浩）を組織し同地区に残る棚田を守り、地域の景観資源として活用する取り組みをしています。

平成25年4月から棚田までの道路と駐車場整備、現地までの誘導看板設置などを行い5月25日には、棚田の説明看板と展望台が完成し、見学環境が整いました。

「金山棚田」は、傾斜地を開墾して作られた棚田で4反歩の面積の中に約100枚の田が密集しています。1枚1枚の面積が、2〜3畳ほどと小さいため、機械作業も難しく、田植え、畔塗りなどは手作業で行われています。農業用水も上段の田から下段の田へ水が落とされる田越灌漑により供給されています。

会長の千田さんは、「普通ならばこのように手間のかかる田は、まっ先に耕作放棄地になってしまいが、所有者の金山孝喜さん

は、代々守り続けてきた。大変御苦労されたと思う。これから先もずっと守り続けていくには、個人の力では限界がある。耕作が困難になる前に地域の方やこの活動に賛同する人たちで協力して棚田を守る仕組みを作りたい。」と語っていました。事務局の小岩浩一さんは「貴重な棚田を守り、未来に残すために、地域でサポートしていこうと会を立ち上げた。今後は、さらにこの棚田をPRして、市内外の人や大学生などたくさんの人にこの棚田を見に来てもらい、農作業体験等を通してサポートの輪を広げていきたい。」と抱負を語っていました。



菜の花畑で農業体験学習
とっさんこう
渋民 東山郷農家組合

同組合では、地域の環境保全活動や景観形成の取り組みとして、菜種油加工用の菜種の種まきと収穫祭行事を地域の子供たちと一緒に取り組んでいます。

10年前から菜種油の採取に菜種を栽培し、同組合オリジナルの「東山郷なたね油」を作っており、菜の花の刈り取りは、7月下旬、搾油は11月、組合員が運搬、乾燥、選別、袋詰めなど多くの作業を担当し、今年は170本の製品化を目標としています。

今年5月には、佐野脇菜の花畑にて子供たち対象の写真コンテスト撮影会が開催され、その写真は11月の渋民文化祭に展示、12月の収穫祭で表彰式が予定されています。撮影会に参加した子供達は、レンズを通して一面の菜の花畑の美しさに大感動しました。

これからも、地域の子供たちが農作業体験を通して地元農産

物への関心や興味を持ち続け、やがて「ちいさな担い手」を育てていく取り組みへつながればと期待します。



『農地の日』に実践活動
農地パトロール

昨年で農地法制定から60周年を迎え岩手県農業委員会系統組織では7月15日を「農地の日」（農地法制定日）と設定しました。その一環として、当農業委員会では、7月10日及び12日に市内全域で農地パトロールを実施しました。

農業委員・事務局員・支所職員が荒廃農地の状況を目視で調査して歩きました。平場地域は、

ほとんど耕作されている状況で、転作田では永年性牧草が草刈管理されるとともに、大豆・そ菜等が栽培されていました。しかしながら、雑草が腰のあたりまで生い茂っているところもあり、今後、農業委員が各地域を回って指導していくこととなります。農業委員が農家を訪問した際には、遠慮なく普段農業に関して思っていることやご意見等をお聞かせください。



**老後の備えは
農業者年金で安心**

農業者年金制度は、少子高齢化が進むなかでも安心して加入することができ、税制度の優遇

などメリットも多い公的年金制度です。

農業者年金の6つのポイント

- 1、農業業者なら幅広く加入でき、家族一人ひとりが自分の年金を掛けられます。
年間60日以上農業に従事する60歳未満の方で、国民年金1号被保険者であれば、経営者はもちろん配偶者や後継者の男女も関係なく加入できます。
- 2、自分が積み立てた保険料とその運用益で自分が将来受ける年金額が決まる「積立方式」なので、少子高齢化時代も安心です。
- 3、保険料は2万円〜6万7千円の範囲で自由に選択でき、途中で見直しもできます。
- 4、年金は終身受け取ることができ、仮に80歳前に亡くなった場合でも80歳までの年金の現在価値相当額が死亡一時金として支払われます。
- 5、支払った保険料の全額が社会保険料控除の対象になるなど、税制面の優遇措置があります。

6、若い時期から長い期間、農業の担い手として頑張る方には、保険料2万円のうち最高1万円の国庫補助があります。お問い合わせは農業委員会事務局または各支所産業経済課まで。

新任委員さんご紹介

いわい東農業協同組合の役員改選に伴い、同組合推薦の農業委員として、新しく千厩地域の遠藤恭一氏が6月26日付で就任されました。



遠藤 恭一氏
59才
千厩町小梨
農地専門委員会

退任された委員さん

昆野 満氏

農業委員（いわい東農業協同組合推薦）として、千厩地域を担当され、7年9カ月ご活躍いただき、当市の農業・農村の発展に寄与いただきました。その御労苦に感謝申し上げます。

編集後記

富士山の世界遺産登録が決定した。水不足が田畑に深刻な影響を及ぼしているが、農作業をする体にも自然と力が沸き立つ明るく元気の出るニュースである。

世界と云えば、7月から日本もTPP交渉へ参加する。会議に途中乗車する国の発言力はいかに。農家は今後、農業の継続にどう取り組めばと日々考える。地域・集落でのマスタープランは農業を営む人々のこれからの道しるべとなつてほしい。これからと云えば、来年に市内の両JAが合併し、「JAいわて平泉」としてスタートする。今後、一変するであろう農業環境での舵取として「力」を発揮してほしいものである。

（編集委員 千葉久壽郎）

農委だより編集委員会
編集委員長 千葉 綾雄
副編集委員長 佐藤 繁
編集委員 佐々木栄一、石川誠司

伊藤弘志、三浦才子
齋藤憲子、千葉久壽郎